

民間社会福祉施設職員等海外研修・調査報告

～北欧の福祉に触れて～

津久井やまゆり園生活 3 課
永嶋 正樹

1. 研修の概要

公益社団法人社会福祉振興・試験センターが実施した「2019 年度民間社会福祉施設職員等海外研修・調査」のヨーロッパ班(9 月 25 日から 10 月 4 日の 10 日間の研修)に参加した。全国の障害児者関係施設から 10 名が参加しスウェーデンとデンマークの福祉施設の視察等を行なった。(フィンランドは観光のみ)

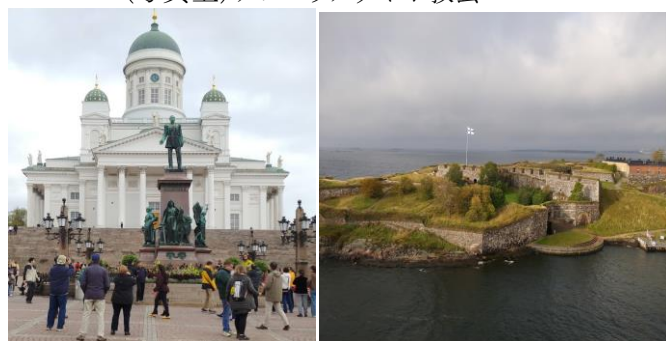
Mなど)高いGDPを誇るが失業率も高い。45%を超える高い税率が高福祉サービスを支えている。



(写真左) ノーベル賞のメダル(のチョコ) (写真右) ストックホルム市庁舎青の間(ノーベル賞晩餐会会場)



(写真上) テンペリアウキオ教会



(写真左) ヘルシンキ大聖堂 (写真右) スオメンリナの要塞(すべてフィンランド)



(写真上) ストックホルム地下鉄の駅



(写真上) シリアライン(ストックホルム・ヘルシンキ間の移動で乗船した客船)

2. スウェーデン(ストックホルム)

国土は約 45 万平方km(日本よりやや広い)森林地帯が多く、人口は約 1000 万人。首都ストックホルムは北欧最大の都市で多くの島から成っている。国際的な企業が多く(イケア、ボルボ、H&

令和元年度 海外研修派遣事業

以下はスウェーデンでの訪問施設等。

(1) Swedish Quality Care (SQC) スウェーデン・クオリティ・ケア

SQCは、民間の企業で、理念として「ノーマライゼーション」「自己決定権」「自立支援」「個別ケア」の4つを掲げ、医療・福祉・教育などの分野の様々な研修プログラムを持ち、スウェーデン外務省やスウェーデン大使館商務部とも連携しており、日本でも通念に渡り研修や講演を行なっている。まずここでスウェーデンの福祉の概要のレクチャーを受けた。以下はその概略。

- ① 行政・・・行政は国と21のランスティング（県）、290のコミューン（市町村）から成り立っている。社会福祉においては国は法律の制定や障害年金の支給、県は医療、市町村は教育と高齢者・障害者・児童の福祉を担っている。それぞれが財源を持ちサービスが重複することは無い。
- ② 医療・・・在宅での生活を可能とするホームリハビリや訪問看護、高度在宅医療のサービスが整っている。
- ③ 障害者の教育・・・小中学校は特別学校や普通校の特別クラスに10年間通う。高校は4年間通い就労の為の訓練や実習などがある。小学校では重度障害児1人に対して教師1名アシスタント2名が配置される。
- ④ LSS法・・・障害者がサービスを利用できる権利を保障する法律。専門の知識を持ったソーシャルワーカーがその人に必要なサービスを決定している。
- ⑤ パーソナル・アシスタンス・サービス(PAS)
LSS法に基づきPASは障害者の自立を支援し個々に合った支援を提供し好きな時に好きなことが出来ることを可能にする制度。日常生活を送る権利を保障する。

SQCではその他、支援機関やサービス、居住についての説明があった。制度やサービスの利用などの説明の中で「自立」「個別」との話が多くあった。ノーマライゼーションの実践が制度などか

らも感じられた。

(2) Hummelmora Center (フンメルモーラ・センター)

アクティビティーセンターは、仕事に就いていない成人の障害者が日中を過ごす場、社会参加の場である通所施設で主に就労・文化活動・感覚刺激の3つの目的に分けられている。フンメルモーラ・センターは、ストックホルム近郊の市にあり感覚刺激を重視していた。楽器やボールプールなどスヌーズレンの設備が充実していた。通所の送迎は大型の車いすが何台か乗る大きな車が使われていた。外部の専門の業者によって行われ、利用者が帰った後は、準備やミーティングに時間を使えるとのことだった。施設内には移乗に使うリフトが完備されており職員の健康にも配慮がなされていた。個々に合わせて活動の選択や時間配分が行われていた。



(写真上) 外観



(写真上) ボールプール



(写真左)送迎車 (写真右)リフト



(写真上)出版雑誌



(写真上)IPADを使ったコミュニケーション



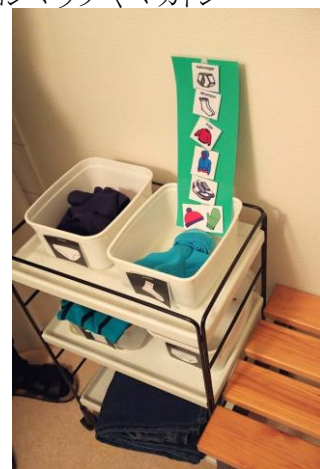
(写真上)コミュニケーションマップやマカトン

(3) Habiliteringscenter Järva (ハビリテーリングセンター ヤルヴァ)

ハビリテーションとは、先天的・恒久的な障害を持つ方に対して日常生活での困難や課題を軽減できるように行なう訓練・治療で、リハビリテーションとは明確に区別されている。ハビリテーリングセンター ヤルヴァは、ストックホルム県によって運営されている通院型の医療施設で21あるハビリテーションセンターの1つ。PECSやマカトンを利用したコミュニケーション、自立生活のスキルを身に着けるための作業療法、スヌーズレンを元にした感覚刺激の3つの分野の訓練治療が行われていたコミュニケーションの訓練では選択する訓練も行われていた。IPADも利用され様々な用途に使われていた。作業療法でもコミュニケーションと同じ絵カードが使われており、統一した支援・訓練が行われていた。感覚刺激の訓練で良好であれば県内に数か所ある大きなスヌーズレンセンターの利用に繋がっていている。



(写真左)買い物支援ツール



(写真右)着替えの支援表



(写真上)感覚刺激の部屋

(4) Svärdsiljans group living home (スヴァ
ルズリリアン グループ リビング ホーム)

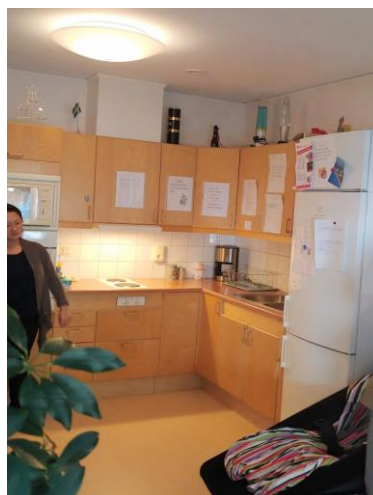
ストックホルム市が運営する重度障害者のためのグループホーム。各居室と共有のリビングとダイニングルーム、洗濯室、職員の事務室などがある。各居室は、キッチン、リビング、ベッドルーム、ストレッチャーが十分に入るシャワールーム(トイレ付)で構成されていて、好みの物が自由に置かれていて個性あふれる部屋となっていた。庭にはそれぞれが部屋では使用しない物が仕舞える倉庫も完備されていた。入居者は5名で、うち4名が車いす使用で1名は夜間常時見守りが必要。職員は平日は朝2名・夕方4名・夜勤2名の1日8人体制。(週末は+1名)正看護師による訪問看護が毎日あり、緊急時は24時間連絡が取れるとのことだった。



(写真上) 外観1(玄関側)



(写真上) 居室のシャワールーム



(写真上) 居室のキッチン



(写真上) 外観2(庭から)

3 デンマーク(コペンハーゲン)

国土は4万3千平方km(九州と同じくらい)ヨーロッパの北部に位置しユトラン半島と400以上の島から成る人口約578万人の「世界で一番幸せな国」と評される民主国家。消費税25%など高い国民負担率を元にした「福祉先進国」であるとともに風力発電を主とした再生可能エネルギー先進国である。



(写真上) ニューハウンの街



(写真上)風力発電



(写真上)アマリエンボー宮殿の衛兵交代式



(写真左)人魚姫像 (写真右)チボリ公園とアンデルセン像



以下、デンマークの福祉等の概要と訪問施設

(1)デンマークの医療・福祉・教育・制度

①デンマークでは、医療は無料で女性の社会進出の為、特に出産や育児制度が充実している。地域(県が再編成されたもの・レギオン)単位で運営されている。

②福祉は、市(レギオン)が運営。障害福祉はデンマークで生まれた「ノーマライゼーション」の考えが根付いており、介護・医療を含め個別の制度はなく「社会サービス法」で一元的に規定されていて、「障害を補って同じ社会人として生活できるように保障していく」という基本理念の下で機能

的・社会問題が原因で何らかの障害に対して様々な保障をすることで機会均等を実現している。財源は、医療・介護ともに全て税金で賄われている。

③年金に関しては、「年金法」により障害者年金が決められており、3段階に分かれていたが、2003年の法改正により1元化されている。65歳以上は一般の国民年金に移行する。

④教育は、「学校法」によって定められ、一般のクラスに通えない障害者の教育は国民学校(7歳～17歳)の特別クラスや特別学校で障害児のための教育が行われている。

(2)AKUcenter Ejegod(アクセンター・アイエゴ)

A(仕事)K(カルチャー)U(発達)を意味する。1992年に設立された、通所施設で90名ほどの利用者が在籍し、1日30名程度が利用している。身体・知的障害の18歳から70歳までの方が主に市の送迎サービスを使って利用している。利用者は、厨房・清掃・園芸・音楽・絵画や運動などのプログラムをタイムスケジュールに沿って参加している。スケジュールは、絵カードで提示され、仕事の成果にはトークンエコノミーの手法も取り入れられていた。作業などが難しいグループには生活訓練が出来る部屋があった。また、身体・感覚刺激の活動のプログラムもあり、専門の指導員が配置されていた。食堂が併設されており、活動のプログラムであるとともに朝食や昼食が提供されていた。食堂はいつでもコーヒー・紅茶が無料でアルコールの販売も行われていた。音楽活動は、殆どの利用者が参加し、職員・利用者がともに楽しんでいる様子が印象的であった。紙風船と折り紙を日本から持ち込み交流会を行った。身振り手振りでコミュニケーションを取り、鶴を折りともに楽しんだ。その後は「幸せなら手を叩こう」を両国の歌詞を交互に歌い交流を行った。



(写真上) 外観



(写真上) 食堂



(写真左) 週間予定表



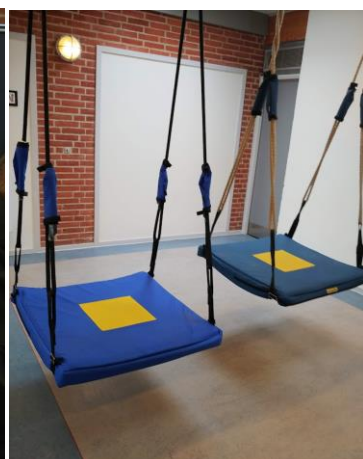
(写真右) 野外活動



(写真上) スケジュールと目標シート



(写真左) 音楽室



(写真右) 室内ブランコ



(写真上) 絵画室

(3) Sofieskolen (ソフィエスコーレン)

1964年設立。北欧初の自閉症専門の支援学校。自閉症スペクトラムとそれに伴う障害を持つ児童・青少年を対象にTEACCHプログラムを軸に療育支援を行なっている。利用者の障害程度は重度。保育(2～7歳 8名)・教育(7～18歳 25名)・入居施設(7～18歳 20名)の3つのセクションで構成されている。見学は保育・教育の施設で行われ、2階建ての建物でアスレチックなどを備えた園庭があった。建物内部は、長い廊下に沿って少人数クラス(3～4名)の小さな教室が並んでいた。セクションごとに大きな扉で施錠されて区切られていて、子供の手が届かない高所に開閉スイッチがあった。教室内はパーテーションで区切られて個々のスペースが明確に分かれていた。1人のスペースは、学習エリア、休憩エリア、スケジュール確認をするテーブルがあるトランジェットエリアに分けられて構造化されていた。壁で区切られた教室内だが暗さは無く、白を基調とした開放的

令和元年度 海外研修派遣事業

な印象の明るい教室だった。スケジュールや教科書などの置き場所など絵カードを用いてわかりやすく表示されていた。ソフィエスコーレンで働く際には必ず TEACCH メソッドの講座を1週間受講している。絵カードは職員と利用者のコミュニケーションにも使われ PECS を用いて職員との意思疎通が図られている。

①ソフィエスコーレンの教員との質疑応答(抜粋)

(Q 見学者) 社会適応のための小集団活動は行っているか。

(A 教員) 行っていない。重度の自閉症の子どもたちは小集団の中でさえも生活するのが難しいため、社会の一員となるのは難しい。しかし、施設の利用者たちを見ている限り、幸せだという風に思う。彼らは私たちとは異なった価値観を持っているので、友達がいないから寂しいということではなく、1 人であることを幸せと感じている。私たちは彼らが自分の世界の中で幸せと感ずることが大切と考えている。

(Q 見学者) インクルージョンという考え方の一方で、自立が難しい人に関してはこういった施設で生活していくことが本人にとって幸せだという認識で良いのか。

(A 教員) その通りです。この施設は知的障害も含めて一番重度の人を扱っていて、特にマンツーマンで対応している利用者は8名いる。ここの利用者は資格を取ることや、通常の就労をするということは殆ど無く、インクルージョンの裏側にいる存在と考えている。社会に出たら困難なことが沢山あるが、施設での生活はそれらから守られている。デンマークの法体制下では入居施設にいる人は働く必要は無く、行政の保護下にあるからである。

私たちの感じる幸福と、彼らの感じる幸福は違う。自分たちの感覚を強要するのではなく、彼らの価値観を理解して受け入れることが大切だ。



(写真上) 外観



(写真上) 校庭



(写真上) 学習スペース



(写真上) 教室

(4) Snoezelhuset Gentofte (スノーゼルフセット・ゲントフテ)

1970年代にオランダで始まったスヌーズレンを行なう専門の施設。デンマーク国内に9か所ある。スノーゼルフセット・ゲントフテは2012年開設。24時間365日いつでも利用可能で対象も年齢制限は無く(スウェーデンでは対象年齢を14歳までと15歳以上で施設を分けている)障害者や認知症患者などを中心に一般市民が1時単位の時間貸しで利用できる。(日本円で7000円/1hほど。)PT、OTが在籍しアドバイスなどが受けられるが、基本的には自由な利用が出来る。施設内は5つの部屋があり内4部屋がそれぞれ色などを特徴としたスヌーズレンルームとなっている。

- ① 赤の部屋・・・活動的な赤色を基調とする室内で白い壁の室内に大きな赤いベッドがあり、寝ころぶと音楽の振動を感じられる。大きなバブルチューブが飾られていた。
- ② 黒の部屋・・・洞窟をイメージし遮光された部屋。視覚情報を制限し視覚情報過多の方でも落ち着けるようにしている。
- ③ 白の部屋・・・感覚的な刺激をダウンさせる部屋で温められたウォーターベッドは音楽の振動が軟らかく伝わるようになっていた。
- ④ ボールの部屋・・・大きなボールプールがあり、ボールから伝わる圧力を全身で感じ、自分の体を実感できる。



(写真上) 外観



(写真左) ボールの部屋 (写真右) 赤の部屋

4 所感

福祉の理想の国というイメージだったが、実際には美しい古い町並みは石畳で凸凹で、バアフリーは日本の方が進んでいるのではと思える街並みだった。見学した施設やレクチャーの中でも先進的な考え方や知見が得られることは無く、法や制度の違い、予算や施設の規模など大きく違うところはあるものの、支援の現場では TEACCH や PECS などが実践されていて、日本との根本的な違いはあまり無いと感じた。大きく違うと感じたのは、国全体にノーマライゼーションが根付き、「個別ケア」「自立支援」「自己決定」が一貫して行われている点だ。支援も幼少期から成人まで一貫した方法で行われているように感じられた。一方で「インクルージョン」という考えを持ちながらも同じ地域や社会への参加を求めず、施設で暮らすことも良しとし、個々の幸福を最重要視する考え方も併せ持っていた。障害や福祉に限らず出自や性などの多様性を認める社会が「世界一幸せな国」と言われる所以だ感じた。



(写真上) デンマークのオープンサンド



(写真上)施設で頂いた昼食(ラザニア)



(写真上)スーパーの様子

夜や早朝の暗い街を歩くと幸せな国の裏側も垣間見ることが出来ましたが、人種差別や治安に不安を感じる事もなく楽しく過ごせました。街は古い建物や石畳が多く残り、統一感があり落ち着いていてとてもきれいでした。しかし喫煙マナーは数十年前の日本のようでした。スーパーでは、チーズや果物・ビールなどの種類が豊富で食べ物はどれもとてもおいしかったです。リコリスとサルミアッキというお菓子以外は・・・